

# 日本英学史学会 中国・四国支部

## ニューズレター

No.59

*Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter*

### 副支部長就任のご挨拶

松岡博信

先日の研究例会において開かれました支部総会において、田中正道先生の後任として副支部長にご推挙いただき、ご承認いただいた安田女子大学の松岡博信です。まことに微力ではありますが、少しでも支部の発展のために尽くして参りたいと存じます。どうかよろしく願いいたします。

中国・四国支部の前身であります広島支部と私の出会いは、今から17年前に遡ります。当時、事務局を引き受けておられた寺田芳徳先生のお勧めがあって入会し、寺田先生の精力的な事務局運営の一端を、馬本勉先生と共に担わせていただきました。その後、馬本先生から会計を引き継ぎ、今回の研究例会をもって事務局に仕事をお返りするまで十余年に渡って担当させていただきました。会員の方々のご協力と馬本事務局長のご尽力のおかげで、現在は支部財政状況も好転しつつあり、そういう状況でお返しできることを嬉しく思います。

研究例会の思い出は、枚挙に暇がないほどですが、山田宗八(克惟)先生が実行幹事役を務められた津山市での例会は圧巻でした。山田先生のご発表を大変興味深く聞かせていただき、さらに懇親会や2次会は、山田先生をはじめ能登原昭夫先生門下の方々のご参加で、私が経験したことの無い盛り上がりで大変楽しい思い出となりました。また、松江市で開催され、小泉凡先生が講演された例会も思い出深いもので、特に、翌日催された松江城のお堀の遊覧は、雪の降る厳しい寒さの中でしたが、忘れがたい旅情を味あわせていただきました。当時事務局長を務められていた小篠敏明先生のご尽力、ご配慮に対し、心より感謝申し上げます。

個人的には、フェートン号事件を契機とする蘭学から英学への移り変わり、それに呼応した蘭通詞やその後の福沢諭吉など、当時の蘭学者・英学者の生き方を面白いと感じています。また、ジョン万次郎の数奇な生涯は、私が「英語科教育法」で教えている学生たちに毎年詳しく紹介しており、彼女たちも大いなる感銘を受けています。ネイティブと同等の英語力を持ち、その力で日本の夜明けのために奔走した万次郎は永遠の憧れです。また、明治時代に行われていた小学校英語教育にも大いに関心があります。

無論のこと、英学史研究においては支部の先輩諸先生の足元にも及びませんが、自分の専門である「第2言語習得研究」という比較的新しい視点から英学史の世界を眺めることができたなら、英学史研究もより身近に感じられるかもしれないと、特に最近思うようになってきました。

今後ともご指導、ご助言のほど、どうかよろしく願いいたします。 (副支部長/安田女子大学)

## 日本英学史学会中国・四国支部 平成21年度総会

### 第1回(通算60回)研究例会 報告



日本英学史学会中国・四国支部 平成21年度総会、及び第1回(通算第60回)研究例会は以下の通り開催され、盛会裏に終了いたしました(参加者22名)。ご参加くださいました会員の方々、ならびに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

#### 平成21年度第1回(通算60回)

#### 研究例会プログラム

日時： 2009年5月30日(土) 12:50 受付開始  
会場： 安田女子大学 9号館 9522 教室(5階)  
〒731-0153  
広島県広島市安佐南区安東6-13-1  
TEL 082-878-8111(代)  
参加費： 会員、非会員とも無料

#### 支部総会(13:20~13:50)

議長選出  
前年度活動報告  
前年度会計報告・会計監査報告  
平成21~22年度役員選出  
今年度活動計画

#### 開会行事(14:00~14:10)

挨拶 司部長 竹中龍範(香川大学)

#### 研究発表(14:10~15:10)

「月刊雑誌『上級英語』を読む」

田中正道(兵庫教育大学名誉教授・広島大学名誉教授)

司会：上杉進(元 高水高等学校)

#### シンポジウム(15:20~17:10)

「新学習指導要領と日本の英語教育：

英学史からの提言」

コーディネータ：馬本 勉(県立広島大学)

1. 「明治期の英語教育から」竹中龍範(香川大学)
2. 「パーマーの時代から」小篠敏明(福山平成大学)
3. 「戦後の英語教育から」三浦省五(福山大学)
4. 「第二言語習得研究の歴史から」  
松岡博信(安田女子大学)

#### 閉会行事(17:15~17:30)

挨拶 副支部長 田村道美(香川大学)  
写真撮影

#### 懇親会(18:00~20:00)

とり楽 毘沙門店にて

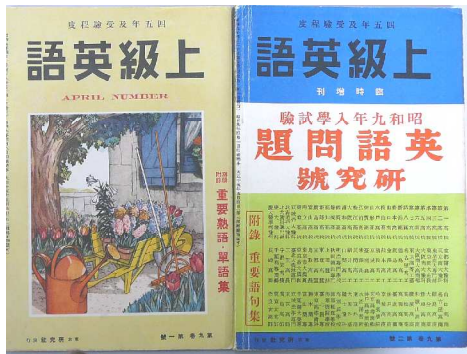
研究発表

「月刊雑誌『上級英語』を読む」

田中正道 (兵庫教育大学名誉教授・広島大学名誉教授)



大正15年4月に創刊された月刊雑誌『上級英語』は旧制高校、高等商業、高等工業等の受験を目指す旧制中学校4・5年生の必読誌であった。発表者はこの雑誌の第9巻(昭和9年4月号~昭和10年3月号)を所蔵しており、今回の発表において現物の一部をフロアへ回覧しながらその特徴を浮き彫りにした。昭和初期の英語教育界のスーパー・スターによる英語学習の在り方についての講話、受験英語対策(連載)、英語英文学の教養を高めるための読物紹介、英字新聞、懸賞模試、さらには臨時増刊号による入試問題、正解、要点の解説等、品格のある文体で中学生のニーズに幅広く対応した雑誌であることを紹介した。



回覧された『上級英語』



司会 上杉 進氏

シンポジウム

「新学習指導要領と日本の英語教育」

英学史からの提言」

シンポジウムの狙い

馬本 勉 (県立広島大学)

2008年から2009年にかけて、小・中・高等学校の新しい学習指導要領が告示された。小学校における「外国語活動」の必修化、中学校においては語数や授業時数の増加、高等学校では科目の再編成や「授業は英語で行うことを基本とする」など、現行のものとは異なる様々な要素が盛り込まれている。

この新しい指導要領を見たとき、「それは本当に新しいのか?」「昔に戻っただけではないのか?」「英語教育は良くなるのか?」といった疑問も湧いてくる。そうした観点から、歴史を研究する学会ならではの視点で考察を加え、これからへの提言を行うことを目的とし、シンポジウムを企画した。

明治期の英語教育から

竹中龍範 (香川大学)



新学習指導要領の改訂のポイント中、本発表では、小学校教育課程への「外国語活動」新設の意味、ならびに、高等学校外国語科の科目構成を、明治期英語教育と対照して論じた。

まず、小学校「外国語活動」について、早期教育の観点から論ずると、明治40年の小学校令改正によって尋常小学校の年限が6年となった時点で英語学習の開始年齢は、それ以前の10歳から現在の中学校と同じ12歳となり、これはその後、戦前・戦後を通じて変わることがなかった。それが再び10歳からの英語学習となったわけである。また、小学校教育課程に、領域扱いながらも、外国語(英語が

原則)が必修化され、明治期には「加フルコトヲ得」  
「随意科目ト為スコトヲ得」とされていた状況に照らして、全児童に義務付けられることとなったことの意味は大きい。

一方、高等学校外国語科の科目構成は、戦後の指導要領改訂のあとを見ると、教科書の種類とあわせ、分科化の流れを強めてきていたが、それが今回の改訂ではむしろ総合化に向かう傾向が見られ、明治期に外山正一などが強く主張した合科化・総合化の考えがようやく実現の方向に向かい出したとすることができよう。

## パーマーの時代から

小篠敏明 (福山平成大学)



今回の新指導要領は、(1)文法統制をゆるやかにし、(2)新語数を増やし、そして、(3)複線型の教育制度へ移行している点を大いに評価したい。同時に、「高校での英語での授業」や小学校の英語学習は、先の見えにくい、大いなる挑戦とも言える。

新しいことが始まるからこそ、私たちは歴史から学ばなければならない。まず、第一に、私たちは全く新しいやり方から始めるのではなく、従来の基本的枠組みの中で実践するという、慎重な態度が必要だと思う。(パーマーは新しいやり方からは始めようとして、失敗した。)その折、1970年代の教育の現代化運動の内容の構造化などは参考になるであろう。

## 戦後の英語教育から

三浦省五 (福山大学)

中・高等学校の学習指導要領が改訂され、小学校には外国語(英語)活動が導入されることとなった。小学校では「コミュニケーション能力の素地」、中学校では「コミュニケーション能力の基礎」、高校では「コミュニケーション能力」そのものを養うことが目標である。高校の学習指導要領には「...授業を実



際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。...生徒の理解の程度に応じた英語を用いる...」との文言も加えられている。日本のような言語環境にあって、英語の発表能力を目指す教育で、あの「文法」と「文型練習」が影を潜めて久しいが、どのようにコミュニケーション能力は育成されるのであろうか。今後、小学校に「教科としての英語」が導入されるであろうが、この度の改訂で気づいた点として、将来を見据えた外国語教育の必要性、目標設定、それに合わせた教員養成や財政問題などの具体的な言語教育政策がさらに重要性を増してきたということである。

## 第二言語習得研究の歴史から

松岡博信 (安田女子大学)

言語習得が本格的に研究され始めたのは1900年代半ばからである。SR理論に代表される行動主義心理学者の「習慣形成」を基礎とする言語習得研究から始まり、第二言語習得に対する対照分析からの予想や説明がなされたが、観察される事実との様々な矛盾が露呈した。その結果、それらを批判する形で登場したのが、Chomskyたちの生得論である。

これらの理論は、当初は、特に普遍文法を中心とする言語学的側面からの研究が主流を占めたが、年齢や適性など学習者要因にも目が向けられ、さらに最近では認知心理学や社会文化学から、動機付け・意



欲などの学習者心理やコミュニケーションにおける場面・機能などに関わる研究も盛んになり、それらが今回の学習指導要領改訂において大いに寄与していると考えられる。



### < 質問用紙より >

#### 竹中先生

・「分科はだめ」という点をもう少し詳しく知りたい。  
・英語を教える先生の調達について。

#### 小篠先生

・まとめ2の、「混乱覚悟」「高校は型に」という点についてもう少し説明を。  
・パーマーのつくった標準的な型が日本になじまなかった部分はどこだったのですか。  
・パーマーの教授法論は豊富に見られるが、教育論（目的論など）についての著作や論文はあるのでしょうか。  
・小学校段階ですでに英語嫌いの児童が出ています。こうした子どもが中学に進むと、小学校英語の被害は中学・高等学校まで及ぶように思います。

#### 三浦先生

・英語を道具として思想を受け止めるというお話をもう少し聞きたい。  
・言語政策について、学会としてどういう具体的な活動が取れるか。  
・どうしたら「おしのがた」英語教育を行うことができるか。

#### 松岡先生

・英語が苦手な学習者を見ると、中・高の間は、繰り返し発声練習が圧倒的に少ないと思います。これは行動主義心理学の否定が関連しているのではないかとさえ思われます。teacher trainingのときにどのように指導しておられますか。  
・小・中・高の生徒に共通する SLA 研究の成果があると思うのは虫が良すぎるでしょうか。  
・高校の communicative grammar の内容はいか

なるものか。

・小学校で学習した英語と中学入学時の学習内容をどう関連づけるか。  
・コミュニケーション文法について、具体例を挙げてご教示ください。

#### 発言者の指名なし（もしくは全員へ）

・高等学校の授業はすべて英語で行うことが、学習指導要領の原則ですが、入試問題との兼ね合いから、授業での日本語使用についてのお考えをお聞かせください。  
・高校で「英語で授業を」は定着しないと思う。なぜ中学で「英語で授業を」をやらないのか。SELHi の様な一部の高校でしか行われない懸念があるが、どうでしょうか。  
・コミュニケーションとは情報伝達ということですか。  
・学校文法とコミュニケーション文法の違いは何か。コミュニケーション文法のメリットは。  
・小学校の先生が英語を教えることの可能性は。  
・小・中の英語教育の橋渡しになる方法は？

### < 例会の感想 >

当時の受験生が求められていた英語学力が少し分かったような気がします。「上級英語」は、幅広い題材を扱っており、異文化理解の話題もあり、現在の学習指導要領の先取りのように思います。

現在廃校になった学校の資料は確かに残りにくく、研究しづらいことがよく分かりました。広島高師、広島高校とともに、広島県の英学史の研究対象である海軍兵学校のことは、注意・注目しておかなければならないと思いました。< 中野俊宏 >

『上級英語』のご発表、興味深く聞かせて頂きました。入試問題の実態から、求められた学力程度が想定されるともっとおもしろいかと思います。

< M.M. >

研究発表とシンポジウムという構成による今例会は、通算 60 回の支部例会を飾るにふさわしい内容となり、特にシンポジウムでは質問紙による形がとられたことで活発な質疑応答が展開され、もう少し時間が欲しかったと思いました。もっとも、質問内容によっては冷や汗をかいていたかもしれませんが、

< Dragon >

初めて参加させていただきました。田中先生のご発表では、中学上級生向けの英語雑誌のレベルの高さもさることながら、戦前の出版物の美しさやレイアウトの巧みに驚きました。

シンポジウムは、4人のパネリストがそれぞれの立場で自由に語られるのが実に刺激的でしたが、けっしてバラバラにならず、それどころか不思議な統一感あるいは一体感といったものが感じられるところを興味深く思いました。<riverson>

昭和初年の受験生になった気がしました。教えられる入試のレベルの高さにもあらためてびっくりしました。

新指導要領を歴史を通して深く考えることができ、ヒントもたくさんいただきありがとうございました。

<Kshu>

田中先生

「上級英語」は旧制高校（現在の大学）受験を目指す若者への受験雑誌ということでとても興味深く、また、高校の競争率が掲載されているのには思わず苦笑してしまいました。

岡倉由三郎をはじめ、栗原基、原仙作、等充実した執筆陣であることもすばらしいと思います。

多くの貴重な資料を基にユーモアとバイタリティあふれるご発表をありがとうございました。

シンポジウム

タイトルに対する4つの時代区分はとてもピンゴ!だと思いました。

「高校において英語で授業をする」というテーマに対して「これまでの内容を全部変えるのではなく（教科書等）今の状況で少しでも英語を使った授業を考えていくべきだ」という示唆をいただきとてもすっきりしました。

「英語で授業」、これは平成の新しいことではなく、すでに明治時代やパーマー時代に実践されてきたことです。「現代の課題」のヒントを先人達の英知から学ぶことのできる「英学史」に出会えたことを誇りに思います。<rainbow>

田中先生のお話は、入試問題の分析で大変面白かった。「私はK予備校に受験するしかないな」という独特なユーモアを交えながら当時の入試がリアルによみがえってきた。今日の競争率の話は面白かったが、次回は入試問題の質的量的分析（学校別、年代別）に期待しています。ありがとうございました。

シンポに関して、それぞれの専門から興味深い話が聞けて有意義であった。ただ、実際に影響を受ける中・高の先生方の意見ももう少し聞きたかった。時間の関係で仕方ないか。

楽しい企画でした。ありがとうございました。

<保坂芳男>

シンポジウムについて

竹中龍範先生：短時間でのご提言は難しかったと

思いますが、教育法規を基軸にしての早期英語教育の観点からのサーベイはとても参考になりました。

小篠敏明先生：H. E. パーマーの「ジレンマ」の解析は「円熟期」(?)に入った研究者を思わせる素敵なプレゼンでした。

三浦省五先生：戦後の激動の時代を振りかえっての提言は「はらわた」にしみ入るものがありました。

松岡博信先生：SLA研究のサーベイがとても参考になりました。それぞれの時代の英語教育の「点検個所」を確定することができました。

<もみじまんじゅう>

来年の5月研究例会で今回のシンポの続き Part IIを継続して欲しい。特に将来を見据えた「今後どうすればよいか」について。<能登原昭夫>

小 - 大の関係をどうしますか。さしあたり、小を受け入れる中の先生方の問題もこの学会で考えましょう。<中村浩路>

それぞれ個性のある先生方によるシンポジウムのプレゼンテーションに興味を持ってました。マネジメント（司会）が立派でした。

テーマの設定が良かった。現代的でした。

オーラルイントロダクションの再評価の必要性を強く感じています。<山本勇三>

田中先生：

豊富な資料を駆使し、戦前の学習雑誌『上級英語』と旧制高校受験の様子を浮き彫りにする、実に分かりやすく楽しいご発表でした。回覧された『上級英語』の表紙に、別冊付録のタイトルがありました。私は中高生の頃、市販の参考書よりも学習雑誌の付録のほうが親しみやすく学びやすい、と感じていたので、「別冊付録 重要熟語・単語集」や「付録 重要語句集」の中身がとても気になります。学習雑誌の付録ならではの取っ付きやすさがあったのではないかと推測しています。

シンポジウム：

コーディネータとして「時の番人」に終始しましたが、パネリスト各氏のテンポよい提案と、フロアから紙面で寄せられた質問の数々により、幅広く興味の尽きない議論が展開され、あっという間に時間が過ぎてしまいました。もっと時間をかけ、フロアの生の声を拾うことができれば良かったのに、などと反省は尽きませんが、この会ならではの面白いシンポジウムであったと思います。パネリストおよびフロアの皆様に感謝いたします。

研究発表・シンポジウムを通じ、歴史的な視点がどれほど「これから」の議論を豊かにしてくれるか、改めて実感した例会でした。<Horse>

## 中国・四国支部ニューズ

### 平成21年度第1回役員会

5月30日(土)の支部総会に先立ち、午前11時30分より役員会を開催しました(出席者8名)。前年度活動報告、会計報告・会計監査報告、新役員の選出、今年度の活動計画について審議を行いました。(詳細は以下の総会報告を参照)

### 平成21年度支部総会

5月30日(土)13時20分より、議長として平本哲嗣会員を選出し、今年度の支部総会を行いました。議事内容は以下の通り。

### 平成20年度活動報告

事務局より昨年度の活動について報告。内容は、(1)支部総会、(2)第1回研究例会(広島)、(3)第2回研究例会(福山)、(4)『英学史論叢』第11号の発行、(5)『ニューズレター』No.54~No.57の発行、(6)役員会の開催(第1回、第2回)、の6項目です。詳細は『英学史論叢』第12号(pp.43-45)をご覧ください。

### 平成20年度会計報告

平成20年度 会計報告	
[収入]	
繰越金	23,367
預金利子	4
補助金	14,000
紀要掲載料	15,000
年会費(55口)	165,000
収入合計	217,371円
[支出]	
通信費	26,210
印刷費	103,530
会場費	3,930
雑費	7,055
支出合計	140,725円
[次年度繰越金]	76,646円

以上、ご報告申し上げます。

平成21年5月25日 会計 松岡博信<sup>㊞</sup>

### 会計監査報告

#### 平成20年度 会計監査報告

本学会の会計を、収入並びに支出に関して、それぞれ関係書類、及び領収書等により監査いたしました。その結果、全て適正、正確に会計処理ができていたことを確認いたしました。  
以上報告いたします。

平成21年5月26日 会計監査 山本勇三<sup>㊞</sup>  
鉄森令子<sup>㊞</sup>

### 役員選出

平成21~22年度の役員を次の通り選出しました。

支部長：竹中龍範  
副支部長：田村一郎・田村道美・松岡博信  
顧問(相談役)：定宗一宏・寺田芳徳・松村幹男  
顧問：五十嵐二郎・小泉 凡  
理事：上杉 進・小篠敏明・河口昭・田中正道・  
    築道和明・能登原昭夫・深澤清治・風呂 鞏・  
    村端五郎  
事務局長：馬本 勉  
幹事：隈 慶秀・中舛俊宏・能登原祥之・保坂芳男  
会計監査：鉄森令子・山本勇三

### 今年度の行事計画

- 1) 研究例会
  - ・第1回 平成21年5月30日(土)  
(予定通り終了)
  - 広島市・安田女子大学にて  
    例会当日、役員会および支部総会を開催
  - ・第2回 平成21年12月12日(土)  
    岡山県高梁市・高梁市文化交流館にて  
    例会当日、役員会を開催予定
- 2) 支部研究紀要  
    『英学史論叢』第12号(予定通り発行)
- 3) ニューズレター  
    No.57(平成21年4月)(発行済み)  
    No.58(平成21年7月)  
    No.59(平成21年10月)  
    No.60(平成22年1月)

## >> 事務局より

年会費納入のお礼とお願い

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費(一般3,000円、学生2,000円)をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。これからお振込みの方は下記口座までよろしくお願いいたします。

(口座番号) 01360-9-43877  
(加入者名称) 日本英学史学会 中国・四国支部

なお、昨年度分未納の方には、2年分の請求書を同封しております。ご納入くださいました後に、今年度の紀要と名簿をお送りいたしますので、ご理解くださいますようお願い申し上げます。

### 研究発表の募集

今年度第2回研究例会は、12月12日(土)、岡山県高梁市文化交流館にて開催を予定しています。

現在、理事の能登原昭夫先生を中心に準備を進めて頂いております。歴史と文化の薫る高梁での例会に、皆様ぜひご参加くださいますよう、今からご予定ください。例会翌日の13日(日)は自由散策を予定しています。宿泊のご案内を含め、次号のニューズレターにて詳細をお知らせいたします。

高梁例会の発表者を募集します。研究発表(口頭発表30分・質疑応答20分・計50分)をご希望の方は、9月末までに事務局へご連絡ください。

### 紀要の配布・販売について

研究紀要『英学史論叢』は、前年度会費を納めてくださった会員の方へ一部ずつ、投稿者には所定の

部数をお渡ししています。さらに追加でご希望の方には、一部1,000円(非会員1,500円)にて販売いたします(郵送料込)。バックナンバーのタイトルは、『英学史論叢』第10号もしくはウェブサイトにてご確認ください。購入の申し込みは事務局まで。

新入会員(敬称略)

河村和也(東京都)

東京女子体育大学・専修大学・拓殖大学

専門分野: 英語教育史

## 英学史学会全国ニュース

第46回全国大会

今年度の全国大会は、明治学院大学白金キャンパス(東京都港区白金台)を会場に、2009年10月10日(土)~12日(月)の日程で行われます。

(主なプログラム)

- ・講演 「米国長老派教会派遣宣教師たちの仕事: ヘボン、ブラウン、フルベッキ 他」  
大西晴樹(明治学院大学学長)
- ・講演 「ヘボン塾およびヘボン塾に連なる人々」  
原 豊(明治学院歴史資料館)
- ・明治学院大学歴史アーカイブの資料解説
- ・研究発表 ほか

日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です(入会金2,000円、年会費5,000円)。本部会員以外の方で、全国大会に関心をお持ちの方は、支部事務局までお問い合わせください。

## 英学史情報ひろば

第35回全国英語教育学会(8月8~9日、鳥取大学湖山キャンパス)の初日に、竹中龍範先生による特別講演が行われます。タイトルは「警見 日本の英語教育200年」。詳細は大会ホームページをご覧ください。

<http://jasele2009tottori.info/>

広島英学史の周辺(25) このたび田中正道先生から松岡博信先生へ、副支部長のバトンタッチが行われました。田中先生には長年、副支部長として会の中心を担って頂きました。厚くお礼申し上げます。松岡先生には長らく支部の会計としてご尽力頂きましたが、今後は支部活動の牽引役としてお世話になります。幹事として、新たに隈先生、中舛先生、保坂先生を迎えました。

能登原祥之先生と4名体制で事務局の補佐をお願いすることとなりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。各地で大雨が続きました。梅雨明けの待ち遠しい日々です。皆様どうかくれぐれもご愛ください。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No.59

2009年7月28日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中龍範)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: (0824) 74 - 1725 (直通)

e-mail: umamoto@pu-hiroshima.ac.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.59 July 28, 2009